

## 巻頭言



## 年頭にあって

所長 武藤 義一

昭和50年の新春を迎えて皆様にご挨拶申し上げます。私は昨年11月半ばから所長に就任いたしましたので、所長就任のご挨拶も同時にいたしたいと存じます。

昨年の正月は突然に起った石油危機の最中でありまして、私の研究分野である環境計測化学でさえもやや色あせたような印象を与えられたほどでありました。しかし昨年の半ばすぎからは、やや落付きをとりもどして参りまして私たちもそれぞれの研究にいつそう邁進しなければ、という決意をあらたにしたところでもあります。

生産技術研究所は、工学の広い分野にわたって高度の基礎研究を行うとともに、必要に応じていくつかの研究室が協力して協同研究やプロジェクト研究を行う、いわば総合工学研究所として、他に類をみない研究活動を行っております。とくに、専門の異なる研究者の間の連絡と協力がうまくいっているのが特色のひとつとして従来から評価され、ロケットの開発、耐震工学の発展、都市における災害と公害の防除の研究などにその協力の成果がみられます。しかし、研究所の内部に居る者としては、協力態勢が必しも十分であるとは考えてはおりません。さらにいつそう研究能力を結集するための努力を積極的に行ってゆきたいと思っておりますので、内外の方々のよりいつそうのご鞭撻とご協力をお願いする次第であります。

さらに、工学の基礎研究に関連しまして私の所感を申し述べることをお許し願いたいと存じます。世間いっばんの方々、自然科学の方面においては基礎研究は理学であって、工学は応用研究であるとみておられます。もちろん私としまでもそれを否定するものではありませんが、今日では工学はたんなる応用科学ではなくして、それ自身がひとつの基礎科学であると考えなければならなくなっているということです。それは工業界の開発研究が急激に大形化していったためもありまして、昔ならば自然科学の基礎研究の成果が工学を媒介として生産に应用されるといった経過をとったのに、今日ではその成果がただちに生産に应用されることが多くなりました。その反面において、工学の研究がきわめて純科学的な様相を呈するようになってきていることは、多くの学術雑誌の報文や、学会の研究発表に歴然とあらわれているとおりであります。

私が三十年以上も研究に従事しております工業分析化学、とくに機器分析の分野におきましては以上のことを痛感しております。とくに研究の初期におきまして、化学の分野にエレクトロニクスが導入されつつあった頃を思い出しまして、当時は電子工学に全く素人であった私が多くの電気関係の先生に協力していただいたことを今だに忘れ難く、そのご好意は感謝にたえません。しかし今ここで私が申し上げたいのはその感謝の気持でなく、電気の先生がたがどうして協力して下さったかという、微弱直流の増幅という、当時では電気関係でも新しい問題としてとりあげていたものを持ち込まれたので、いわば対等の気持でおつきあいできた、ということをかなり後になって知らされたことであります。

生研におきまして、研究協力の実績があります背後にはこのようなことが各分野であったということを知られまして、とくに将来のある若い研究者の方々に訴えたいと思っております。それぞれの皆様の方々のされている研究は工学といえども、基礎科学であり、各研究室での研究が十分に成果のあがった段階で、はじめて他の分野の同じレベルの研究に協力することが可能であるということです。もちろん私が申し上げるまでもなくよくご存知とは思いますが新春にあたっての感想の一端を申し上げたわけです。

なお、年の暮れから新春となるとき、あるいは所長の交替というときに、私の脳裡にひらめくのは道元禪師語録の一節であります。それは除夜にさいしてご自分の居間にお弟子を集められまして教えられた折に「もし自分が大晦日にあたっての感想を聞かれたら、寺の門前の村で梅が一枝咲いただけだよ、と答えよう」と述べておられます。年が変わって新年が来るといっても、旧年は去るのでもなく、新年も来るのでもなく、早く新旧対立の二元的思想から自由の境地に進みなさいということでありましょうか。そこまで悟れない私を省みて恥じ入るばかりであります。